

## 県と公立大学法人福島県立医科大学による懇談会の概要

日 時：平成19年1月15日（月）午前11時～正午

場 所：県庁本庁舎2階応接室

出席者：県 側：佐藤雄平知事、内堀雅雄副知事、室井勝出納長

法人側：高地英夫理事長、菊地臣一副理事長、丹羽真一理事、藤田禎三理事、  
平子健理事、遠藤俊博理事、阿部正文医学部長、中山洋子看護学部長

### 1 懇談会開催主旨説明

これまで、福島県立医科大学との間では、平成15年度及び平成16年度に「設置者と医科大学による懇談会」というのを開いてきたが、法人化後も引き続き県政と大学運営の連携を確保し、県民の期待に応えうる魅力ある大学づくりを進めるために、大学の運営に重要な事項について意見を交換し交流する場を設けるということは重要ではないかと考え開催することとなった。

### 2 資料説明

- ・ 資料1に基づき、（公）福島県立医科大学 高地理事長から説明を受けた。
- ・ 資料2に基づき、事務局より説明を行った。
- ・ 資料3に基づき、（公）福島県立医科大学 高地理事長から説明を受けた。

### 3 意見交換

（佐藤知事）先日、研修医との懇談会に参加させていただいたが、医者としても、人間的にも素晴らしいと感じ、このように教育していただいたことをうれしく思っている。さて、市町村長さんとの地域懇談会をやると医師不足の話が必ず出る。これにはやっぱり医師の定着率を上げることが重要と思うが、県として何が学生たちにできるのか、忌憚のない意見を聞かせてほしい。また、要望だが、県内の官民の病院、それから医師会と連携をとって、医療体制を充実していただきたい。

（高地理事長）定着率の問題についてであるが、私どもの大学は、県内入学者は3分の1だが、残留率は3分の2という高い率であり、東北地区では珍しいことである。

（藤田理事）定着率をあげるためには、地域医療だけの維持ではだめで、大学病院全体のレベルが高くなければいけない。私どもの大学は、県外の人に来てもらい、その半分程度残せているのでこの点では貢献していると思う。

（高地理事長）地域に医師が残るシステムは、極端な話、大学院重点化とメディカルスクールの2つといえる。しかし、メディカルスクールの発想で単なる医師育成だけを目指して、最新の医学を勉強できる基盤を作らなければ卒業生は残らないので、どちらも必要となる。また、へき地勤務にしても、勤務期間中、常に地域と大学とを行き来できる連携システムというのが必要となる。

(内堀副知事) 最近、女性の学生比率が高まってきていると思うが、教育面で女性が増えたことによる影響、また、医師確保という面で女性の学生が増えたことによりどんな影響が出てくるのか教えてほしい。

(丹羽理事) 学生の女性比率は40%ぐらい。女性の方がよく勉強するというのはあるが、問題は、卒後の定着にある。女性は出身地に定着する率が高いので、福島県の受験生、特に女性に対して医学部は魅力あるという話を先生方から伝えていただければと思う。また、女性医師の定着については、女性に長く働いてもらえる女性医師確保策をもっと拡充する必要があると思う。さらに、東北地方で私どもの大学の残留率がいいというのは目立っている部分である。これは、後期研修制度がいいからであるので、この制度をもっとうまく拡充、あるいは継続できるということがあると、現状維持は少なくとも可能な基盤があると思う。

(菊地副理事長) 制度として助手枠を増やしてきたのは、今の話の延長にある。大学を厚くすれば、結果として県内に残る医師が増える。後期研修まで残っても、その後の身分保障がなければ医師はほかに流れてしまう。だから教職員の増員が必要となる。また、へき地勤務については、へき地でなくては得られない経験というのが絶対にあるので必要なのだが、勤務する者が自由に行って自由に帰れるシステム、さらに常にサポート体制がセーフティネットとして、大学又は県に整備されているシステムの構築が地域医療の確保に大事である。

(中山看護学部長) 福島県に看護学系の短大・大学がなかったという歴史的経緯から、未だ就労している看護職の4割が准看護師ということで専門職としての看護師の位置づけが難しい状況にある。専門職としての看護師の育成がこれからの課題である。また、卒業生の3分の1は県内に残っているが、力を付けるために首都圏に就職している者が多くいる。将来戻りたいと願う卒業生が戻ってきてくれるよう附属病院を魅力的にする必要がある。

(阿部医学部長) 医学部入学定員増については、教育設備と教員増員と予算的な措置が必要。また、奨学金の出し方について、大学としても効果的なシステム、奨学金を受けた学生が地域に残れるようなシステムを検討している。今後は、県側とよく話し合っていきたい。

#### 4 お礼のあいさつ(佐藤知事)

いろいろと課題が山積していると認識したが、活力ある福島をつくるのが大前提と思った。最初の話に戻るが、本当に素晴らしい学生を育ててくれていることに感謝申し上げる。これからもどんどん素晴らしい学生を育成していただき、県は県内に残れるような状況を作らなければならないと思っている。これからも、福島県の医療の拠点として、指導的立場から活動していただきたい。